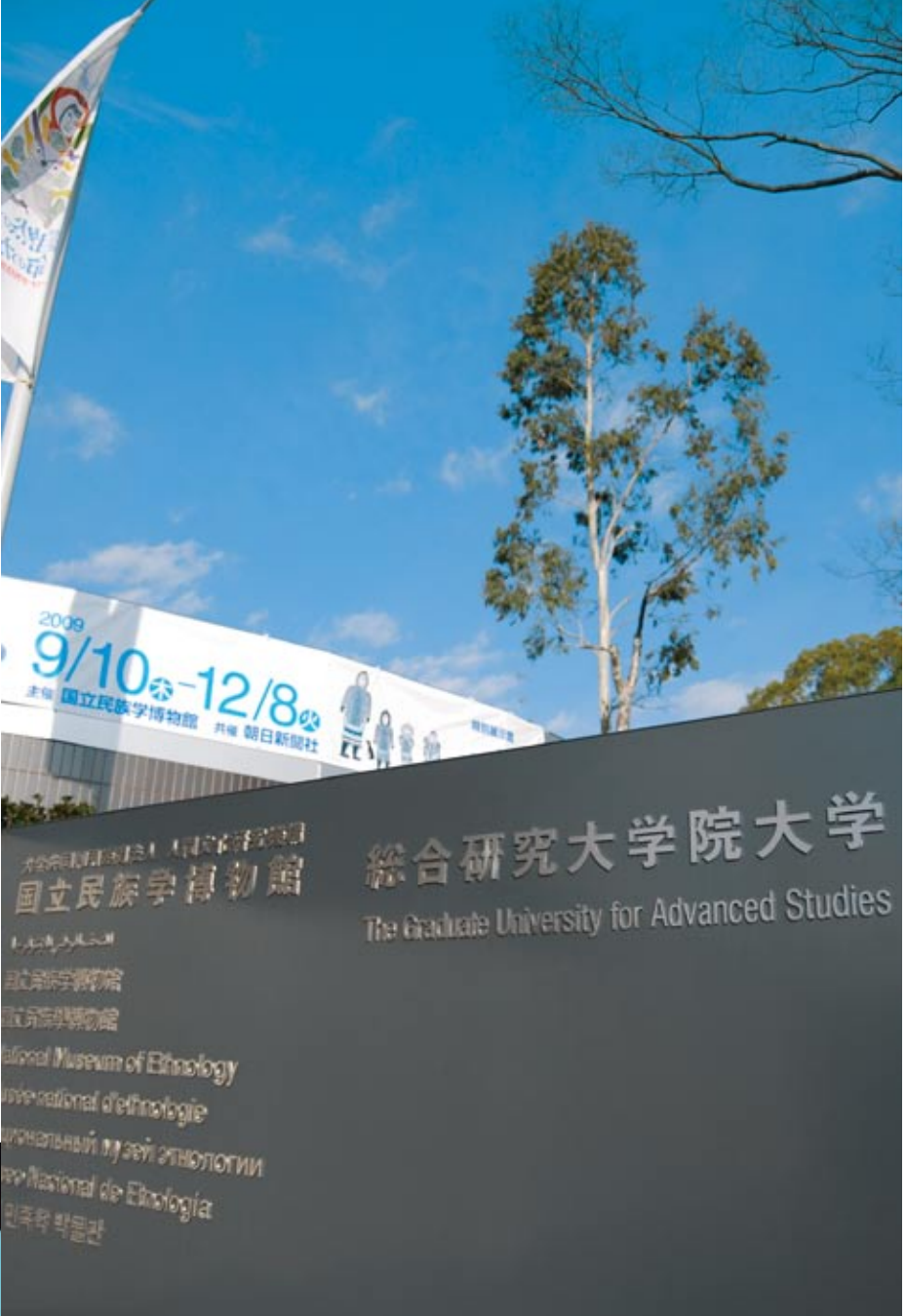


総研大・文化科学研究科 「学術交流フォーラム」をふりかえって



座談会出席者(五十音順)

大森 裕巳

総研大 地域文化学専攻(民博)

荻野 夏木

総研大 日本歴史研究専攻(歴博)

岸上 伸啓

民博 先端人類科学研究部・総研大 比較文化学専攻教授

久保 正敏

(本誌編集長)
民博 文化資源研究センター・総研大 比較文化学専攻教授

近藤 雅樹

民博 民族文化研究部・総研大 比較文化学専攻専長

サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ

総研大 比較文化学専攻(民博)

伊達 元成

総研大 日本歴史研究専攻(歴博)

張 培華

総研大 日本文学研究専攻(国文研)

陳 可冉

総研大 日本文学研究専攻(国文研) テレビ会議参加

梅 定娥

総研大 国際日本研究専攻(日文研)

楊 爽

総研大 国際日本研究専攻(日文研)

歴博：国立歴史民俗博物館 国文研：国文学研究資料館
日文研：国際日本文化研究センター

学部をもたない総研大(総合研究大学院大学)は、

六つの研究科・三の専攻が各地の研究機関に設置されています。

その基盤機関のひとつである民博には一九八九年、

最初の文系の研究科二専攻(地域文化学専攻・比較文化学専攻)がおられました。

昨年一〇月、この文化科学研究科開設二〇周年を迎えて、民博で

公開学術交流フォーラム「極限の文化——人はどこで生きているか 生きられるか」が

開催されました。今号の特集では、フォーラムに関わった総研大の学生企画委員と教員が、

共同利用機関としての民博と、教育研究の場である総研大のこれまでをふりかえり、

今後について語りました。

「極限の文化」を論じた フォーラム

近藤 ■ 今回の学術交流フォーラム初日は、

定例の「みんなくゼミナール」に組み入れ

て、大阪大学の廣川和花助教もお招きした

座談会としました。ポスター発表と二日目の

のシンポジウムは、文化科学研究科の六専

攻からそれぞれ選出された学生企画委員た

ちがコーディネイトしました。国立極地研

究所(極地研)の渡邊研太郎准教授と、比

較文化学専攻の岸上伸啓教授との対談を

セットしたのは、学生企画委員の伊達さん

でした。

伊達 ■ 南極と北極というふたつの極限の世

界で、人はどうやって生きていけばよいの

か、その際にどのような問題点・共通点がある

のかなど、あい対する位置にある地域を研究

されているお二人に、我々が知らない世界について

別展「自然のこえ 命のかたち—カナダ先

住民の生み出す美」を開催中だったので、

参加者もイメージを描きやすかったのでは

ないでしょうか。いろんな地域からさまざま

な知識や資料、価値観・視点が集まって

くる博物館をベースにして、ふたつの極の

話を開けたのは有意義でした。

久保 ■ 「極限」というテーマは、学生が選

んだのですか。

近藤 ■ 前回のテーマが「地域」だったこと

を念頭に、学生企画委員と相談して決めま

した。「極地」では、日本文学専攻などが

なじみにくいので、精神世界も含めた「極

限」ということを想定しました。

岸上 ■ わたしにとってありがたかったのは、

渡邊さんが理系の方だったことです。まっ

たく分野のちがう方との対談は、かみ合っ

た部分も、かみ合わなかった部分もあった

だろうけれど、よかったです。これは、総研大

だからできたことだと思います。



1. 故郷を離れて —ハンセン病「自由療養地」の形成—

- ・群馬県吾妻郡草津町「湯之沢部落」
明治中期～1941年までの60余年
- ・草津大火(1869)により打撃を受けた草津温泉は、復興策として積極的にハンセン病者を誘引
- ・湯池による軽快
→ 旅館・商店経営、労働/自治組織
- ・最盛期には1000名近い病者が生活

南極大陸で フィールドワークを

の複合科学研究科の極域科学専攻がおかれています。このフォーラムに他の研究科からゲストスピーカーをお招きしたのは、初めての試みでした。おたがいにとってよい刺激になったと思います。

近藤 ■ 昭和基地には、極地研以外からも参加できる公募枠があるということでした。

「みんなくゼミナール」で報告する廣川和花助教(大阪大学総合学術博物館)

参加費用は七〇万円くらい……。岸上 ■ シンドニーまでたどりつけば、あとはなんとかなるそうです(笑)。

南極には、まず探検の歴史があつて、次に越冬隊の話があります。ケンブリッジのポーラ・インスティテュートでは、南極探検の歴史や探検家についても研究している。日本の場合、研究者やマスコミの方が昭和基地に住み込んでいられるけれど、お目当てはおもにペンギンや地質・オーロラです。人間のことは研究していません。

南極のすごさは、多くの国が乗り入れているのに、誰のものでもないことです。領有されていない。今後、世界がグローバル化するときの縮図になるかもしれません。すべてを、とりきめのうえでやっています。その意味でも場所的にもいろいろ。もうひとつの可能性は、調査隊員を調査することです。近藤 ■ 佐々木高明さんの面接を受けたとき「民博に来たら世界中どこへ行ってもいい。ただ、うちの研究スタッフがまだ誰も行ってない場所がある。南極大陸だ。そこで越冬隊を調査するのも趣向だぞ」と、いわれました。二〇年ほど前のことです。

陳 ■ わたしは、学生企画委員を二年間つとめました。今回、初めて基盤機関の施設で開催したこと、しかも、一般公開したことが強く印象に残りました。民博の展示が観覧できるなどオマケの部分もあり、学術的な内容と専攻間の交流以外の部分でも、とても魅力的でした。

荻野 ■ 理系の先生をお招きしたシンポジウムは、正直、フタを開けてみないとわからない。私たちの興味もかなりだなあ」と実感しました。そういう場所で一生懸命説明するよい経験ができたし、研究内容をみてもらえ、総研大のことも知ってもらえてよかったです。久保 ■ 「サイエンス・コミュニケーション」は、理系にかぎらず人文系でも大切です。博物館という、一般の人が学問に親しみやすい場もある民博で開催した今回のフォーラムは画期的だったといえるべきでしょうね。

近藤 ■ 閉会あいさつで、平田光司総研大長補佐が「来年も、ホテルなどではなく、基盤機関で開催した方がよい」と言われました。それぞれの基盤機関の特色をいかした味のあるフォーラムができそうです。

梅 ■ わたしは二〇〇六年以来フォーラムにかかわってきました。留学生なので、日本人学生と一緒に仕事をする事自体が勉強になります。企画段階から役割分担して、協力しながらできるのが、とてもよいです。張 ■ わたしも二年目の委員です。今年は総研大の特徴をはっきり感じました。こういうフォーラムやセミナーに多くの人が集まってくる民博の、基盤機関としての実力をすごく感じました。そうした基盤機関に専攻を置く総研大が他の大学と違うところは、基盤機関にトップレベルの研究者がいて、大学のキャンパスと同じように連携していることです。

大森 ■ わたしは新人生の企画委員で、何もかもが初めてのことがかりでした。普通、ポスター発表にはあまり人が来ないと聞いていましたが、今回は「みんなばくゼミナール」

ないという気持ちでした。研究科内でお願いできたのも、民博以外では国文学研究資料館(国文研)の寺島恒世教授だけでしたし……。南極・北極に、日本文学系統の話がどうなじむのだろうと不安でしたが、寺島先生は鴨長明の『方丈記』などから、極限状態での創作活動を読み解かれたので「生きていくための精神的な活動とは」と、気になってきました。

人類学の先生から、アフリカへ行くときには必ず「歳時記」をもって行くという話を聞いたことがあります。「自分の研究に必要な、角度の違う視点や観察眼が養える」ということでした。本業の研究以外のもの



民博の一階エントランスでおこなわれたポスター発表

と組み合わせることが奏効したようで、ゼミナール会場から出てきた大勢の人たちがポスター発表を聞いてくださいました。民博と共催した効果が大きかったと思います。

学生企画委員の苦勞と役得

久保 ■ 企画委員だったからこそ経験できたことがある、異文化との交流などいろいろなメリットがあった、その体験を自分の研究に生かせよう、という感想がありました。

伊達 ■ それはみんな同じだと思います。

岸上 ■ あるテーマを扱うときに、従来は自分の専門でしか語っていなかった。今回は、日本文学やアメリカの医療社会史研究など、いろんな視点からとり扱えました。これもやはり、総研大だからこそできることだといえますね。学際性や超領域を考えるなら、今後、新しいものをつくり出すには、こういうことが必要だろうし、その可能性が見えた気がします。テーマがよければ、すべての専攻や、専攻以外の人たちも参加してくるでしょう。新しい学問が誕生するかもしれない。

近藤 ■ 同じ研究科内でも、専門領域の異なる人たちが集まって、リフレッシュできる。伊達 ■ 渡邊先生も「いつもは理系の研究会ばかりだけど、今回は文化的な話が聞けて、すごく刺激的で楽しかった」と、感想を述べておられました。単一専攻とか、文系だけとかいうのは、そろそろ限界かと。

を、どう消化して本業にいかしていくのかを追求してみるのもおもしろいかなと思います。

楊 ■ 学生企画委員になって学んだことは多く、とくに大事だと思うことが二点ありました。ひとつは、学生みんなで企画したこと。各地・各専攻から集まってきて、アイデアを出しあつて、協力しながらイベントを形づくることを体験したことです。留学生が何人もいて、異文化の人たちが一緒に集まってひとつのイベントをつくりあげていくなかで、各自の行動のあり方や考え方を知ることができ、勉強になりました。

もうひとつは、学術交流フォーラム自体についてです。総研大は基盤機関ごとに専攻があつて、いろんな分野の人たちとコミュニケーションできる、学び合える。その特色がこのフォーラムでも発揮できたと思います。先輩方のポスター発表・口頭発表を見ていて、自分もこういうふうな努力すればいいのだと思ったことが、たくさんありました。

近藤 ■ 学生のポスター発表の方が、教員のものよりデキがよかったです(笑)。

サウセド ■ 他の専攻の人たちに何をやっていのか見せたいので、簡単なことばで、わかりやすくなるよう考えました。学生としては、アピールもしたので、パッションをいれるとか……。ビジュアルにも気をくばりました。

伊達 ■ スタンバイしているときから「このポスター、誰がつくったの?」とか「ちよつと聞きたいんだけど」とかいわれて「一般



テレビ会議参加者を交えての座談会(民博のセミナー室にて2009年11月13日)

近藤 ■折紙や剪纸(せんし)アートなど、文系の発想を理系の学問に応用したら、いろいろと技術革新に役に立つものができるのだと思う。久保 ■人工衛星の太陽電池のたまたみ方などですね。

荻野 ■地震を研究していた寺田寅彦は、夏目漱石のもとに出入りして小説も書いていました。文理両方に鋭い感覚をもっている人で、植物の実が回転しながら落ちる現象の研究もあります。俳句などをつくるために自然を観察していて気がついたことを物理的に解くことにも結びつけていたのだと思います。あまり文系・理系と言わずに壁を低くして交流できると思いますね。総研大には理系の人たちが大勢います。文系だけで困わずに、こうしたフォーラムなどの機会に話を聞いてもらったり、聞かせてもらったり、総研大ならではの、できることがあると思います。

陳 ■わたしは江戸時代の漢文学を研究しています。儒者や漢字者の随筆をみると、やっていることが文学の分野だけでなく、もっとと全般的です。専門的になりすぎないで、多様な興味を持った方が絶対にいい。**サウセド** ■学生企画委員には留学生が多かったのですが、会議は日本語で通しました。それもいい勉強・交流になりました。他の分野、他の機関との交流方法がそれぞれ違うので、その調整がとても大切なことだと知るいい機会になりました。**張** ■今後も各基盤機関が順番に開催するのがよいと思います。自分たちの研究と密接な関係がある環境で、各分野の研究者とも交

あつてもうまくできないこともあります。企画をまとめるには、教員の協力が欠かせない。でも、そうすると教員主導になりかねない。そのバランスが難しい。**楊** ■中国でこういうことをやるときは、最初から責任を分散させます。役割分担を明確にしておいて、失敗したら「その責任者はあなただ」というでしょう。責任がはいまいだと手を抜きたくなります。これは、まさに中国式の考え方もかもしれません。日本式は、みんなで責任をもとうとします。二〇人いれば、二〇分の一の責任をもつ。どちらがよいのか、悪いのかではなくて、考え方の違いです。

今回のフォーラムでは、所与のテーマに対して、それぞれ異なるアプローチをしながらも、同じ目的に達することを学びました。文学作品からのアプローチ、病床からのアプローチ……。**結局、専門知識とは、アプローチの方法に過ぎないでしょう。この経験を自分の研究にいかして考え方をひろげていきたいと思えます。****陳** ■国文研と極地研は、同じ建物のなかにあるので、ロビーの大型テレビが南極の基地の様子を中継しています。以前は無関心でしたが、最近、足をとめて眺めるようになりました。

基盤機関での開催は、他の専攻を理解するうえで有意義が大きかったと思います。何度も民博に通いましたが、民博の建物には、謎や知的な香りが、まだまだ、たくさん詰まっています。

流できます。経済的にもよいと思います(笑)。**大森** ■運営面ではデメリットもありました。所属機関が離れすぎていて、気軽に行き来できない。異分野交流という点では、有意義だったんですが……。

梅 ■わたしが入学した二〇〇六年は、フォーラムを始めたばかりで、誰も何もわからない。みんなが自由に意見を出しあつて進めたのが刺激的でした。今年は経験者の荻野さんにすっかり頼りきつて、他の人たちがあまり頭を使わなかったみたいです(笑)。マンネリ化もよくない。教員ももっと関心をもつて欲しい。

荻野 ■企画委員の半分くらいは昨年からの続きで、今年はどうするかという進め方をしていました。それも意味があることですが、逆に昨年を引きずってしまつて新しい発想が出てこない。後期から参加した大森さんから「これはどういう意図で?」「どういう趣旨で?」と改めて質問されて、ちゃんと説明していなかったなあと気がつき

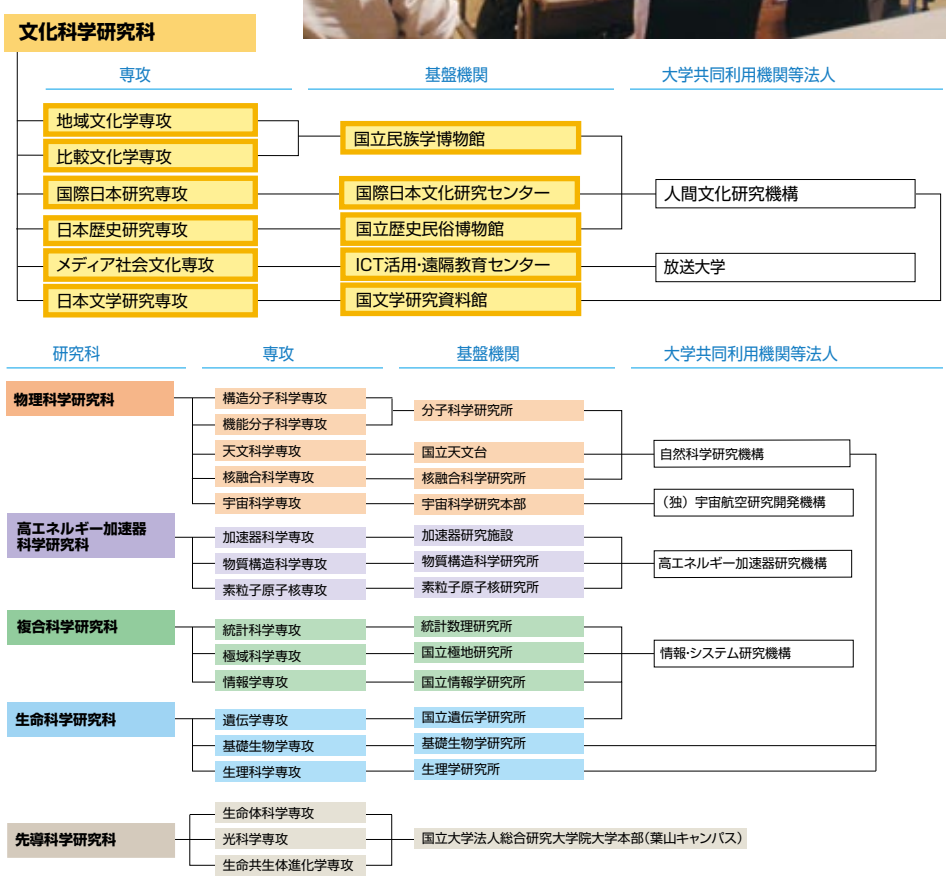


さて、来年は
荻野 ■昨年から感じていたことは、学生の企画に限界があることです。サポートが

二日目のシンポジウム会場風景



総研大 組織図(抜粋)



伊達 ■この事業のよいところは、学生がやりたいことを実現できる仕組みになっていることです。学生の意図を上手にくんで、総研大本部の事務局と各専攻の教職員がサポートしながら、学生たちに成功経験を積ませる効果的な事業になっていると思います。

近藤 ■学生企画委員は忙しくて大変だけど、立ち上げた組織のマネジメントを経験させて人材を養成する実践的なカリキュラムなのです。**久保** ■なるほど。どうも、ありがとうございました。